

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさとルネサンス

第7号（二〇〇六年十二月）

猪（亥） 豚談義

打田昇三

早いもので来年は平成十九年になる。六十年に一回の干支（十干十二支）では丁亥（ひのとい）前回の丁亥、つまり六十年前は昭和二十二年で、第一回の参議院が開かれ、戦後初の地方議会が開会されるなど、ようやく敗戦から立ち直り民主主義の国家として諸制度が整備された年だった。

その前の丁亥（明治二十年）からは所得税が徴収されるようになり、陸海軍に参謀本部が置かれ、保安条例や出版条例で国民を抑圧する帝国主義国家の体制づくりが始まった。

今度の丁亥には明治時代に逆戻りするような感覚の政治は止めて、戦後民主主義の時代をスタートさせた「主権在民」の思想を再認識する弱者に優しい政治が行われることを期待する。

別に科学的根拠がある訳ではないが、丁亥の年には地震、戦乱、圧政、思想弾圧などが多かったようなので、治安や防災の面を含めて行政に携わる方々に心して頂きたいと願っている。

人類は猿から進化して未だ数百万年しか経たないからボスを囲んで暮らしていた遺伝子が抜けきらず地方・中央とも政治に関わると、すぐその気になって安いスルメみたいに踏ん反り返

る人物が居るし、取り巻きの暇人も「先生様」などと煽てるから、本人は選んで頂いた公僕であることを忘れる。ましてや権力の座に就いたとなると選挙でも無ければ庶民のことを思い出しもしないで政策を決めるようだ。

序でに明治二十年から前の丁亥年の出来事を見ると、文政十年には幕府が儉約令を出して日傘を禁止し芸妓を処罰したりする中で傲慢にも幕府関係者は適用除外にしている。その前の明和四年には各地で農民たちが強訴や徒党を組み幕府の圧政に抗議する騒ぎが続ぎ、尊皇思想の先駆者である山県大弐が謀反の罪で処刑されるなど徳川幕府の政策に綻びが見えてきた。

江戸時代中期、宝永四年の丁亥には富士山の大爆發で各地に大地震が起きている。不思議なことに噴火や地震は秋から冬にかけてだが正月に幕府が防火対策を発令し二月には雑説・流言や落書・捨文などを禁止しているから、噴火や地震の予兆が早くからあったのかも知れない。

その前の丁亥は正保四年である。石岡（府中藩）ゆかりの英勝院（太田道灌の子孫で水戸黄門の祖母）や時代劇定番の春日の局などが六十年代で死んだ時代であるが、この年も五月に大地震が起きている。この地震は江戸だけだったが被害は有ったと思われる。それよりも、予告な

しに二隻のポルトガル船が長崎にやってきたのが国内は大騒ぎになった。

そして戦国時代になると府中城落城で大塚氏が滅亡する三年前の天正十五年が丁亥の年にある。この年に豊臣秀吉は九州の島津義久を降して大阪城に凱旋し、秋には聚楽第に移り住んで北野の大茶会を催している。徳川家康とは前年に和睦し小田原の北条氏だけが秀吉に服従していなかった。石岡の大塚氏は孤立した北条方に付いていて滅亡に追い込まれたらしい。

強大な勢力の狭間でどちらに付くか判断は難かしいし、現代の政治家も選択を違えると思わぬ冷飯を食うことになる。本当はそういうことが無い人材優先の政治が理想なのであるが、所詮は野望の渦巻く猿の惑星？に過ぎないのだから仕方がないとして歴史的には、どのような名門でも滅亡してしまつては元も子もなくなり城跡さえも残して貰えないのである。

大永七年丁亥の年は、応仁の乱が収まつてから五十年経っているのに、次の覇権を狙う武将たちが京都周辺で大小の合戦を繰り返している状況だった。政治の中心である幕府の重臣たちが争いの張本人だから、それが地方に影響して戦国時代の開始に相当するのがこの年だった。

一口に戦国時代と言ってもこの頃は太田道灌や北条早雲が没し、武田信玄、毛利元就、今川義元らが動き始めたほか、各地で中小の武将が争っていて、石岡近辺では筑波山麓の小田氏、水戸城の江戸氏、そして府中城の大塚氏が小競り合いを繰り返すのを、東北の佐竹氏がじつと

窺っている状態であつたらう。戦国を統一した織田信長・豊臣秀吉・徳川家康などが生まれてくるには未だ少し早い。

織田信長が、長篠の合戦で足輕に鉄砲を使用させて天下無敵と言われた武田の騎馬軍団を打ち破つたことは知られている。日本への鉄砲の伝来は天文十二年（一五四三）とされているから三十数年で大量生産に達したのである。

鉄砲に付随して火薬もその頃に伝わつたものと思つていたが、実は日本中が乱世に突入する契機となつた応仁の乱で「火矢」という火薬を用いた武器が使用されていたという。このため「汝や知る都は野辺の夕雲雀」

あがるを見ても落つる涙は

と嘆きの歌に詠まれたように都は灰になつた。応仁の乱は応仁元年（一四六七）五月から本格化したのだが、その年は三月まで文正二年であつた。悲しくもその年が丁亥である。

さて、平成十九年から逆に丁亥の年を辿つて十回目の六百年前は西暦一四〇七年、応永十四年になる訳だが、この年は日本諸国に大地震が発生しており、特に会津地方が酷かつた。時代的には金閣寺を創建した足利義満の頃である。

その先の六十年を探つて行くと南北朝争乱の最中になりそうなので止めるとして、最初にお断りしたように干支（十干十二支）には科学的根拠は無いが古代中国では遠く殷時代（紀元前一六〇〇年頃から実在した国家）の甲骨文を記録した「河図洛書」にも使用されていたらしく日本には欽明天皇の十五年（五五四）に朝鮮半

島の百済国から、軍隊を要請する見返りに易学の博士が伝えたとされている。

十干では甲（陽）が兄と弟（陰）に分けられるから「丁」が「丙」の弟で「陰」なのは仕方がないとしても、十二支の動物の中では一番に元気が有りそうな「亥（猪）」が最後というのは少し抵抗がある。亥年に地震や戦乱が多い原因は猪の不満の爆発であるうか。

猪はヨーロッパからアフリカの北部、アジアの中部・南部に生息するそれでアメリカ大陸には輸入された品種が野生化しているとか。日本には北海道以外にいるらしい。人間と動物との棲み分けが明確だつた頃は山中で団栗や小動物などを餌にしていたようだが、近頃は山間部の農作物を食い荒らしている。何しろ雑食性なので米・麦・芋類など何でも喰らう。

人間も雑食性だから猪と人間とは基本的には相容れない関係にある。特に人間が狩猟採取の生活から進歩して農耕牧畜で生きるようになるに汗水垂らして耕作した田畑を猪が荒らす構造が出来上がつて、猪は古代から「害獣」に分類されていたようである。

人間に可愛がられたり畏れられたり、或いは身近に居る動物はよく「諺」にも出てくるが、「猪（亥）」は十二支に入れられながら「猪突猛進」のほかは知られた諺もない。

尤も「猪も七代目には豚になり」とか「遼東の豕（りょうとう）のいのこ 見聞の狭いこと」など猪は飼いや馴らされて豚になる運命なので、作物を荒らされる恨みを込めて昔の人も猪を諺

にはしなかつたのであろうか。

動物愛護を唱える人たちには怒られるかも知れないが、農家の方々の苦勞を思えば農作物の被害は防がねばならない。猪は太古の時代から貴重な蛋白資源であり狩猟の対象になつていたようだから、害獣除去を徹底して食用猪肉を増やし怪しい国の牛肉などを食べないことにすれば皆さんが健康でいられるのでは？…

尤もイギリスでは乱獲により猪が絶滅したというから鉄砲加減も難しいのかも。日本では八百年程前の記録で、かの源頼朝が伊豆の蛭ヶ小島に流人生活を送っていた頃、周辺の武士たちが相談して狩を催した。平家全盛時代で伊豆の武士たちも平家に従っていたが元は源氏の家来だったので、今ならゴルフにでも誘う程度のことと頼朝を交えて狩猟大会を開いたのである。

これは曾我兄弟の仇討が行われ富士の裾野の巻狩りではなく小規模な狩だつたが、獲物として数日間で熊三十七頭、鹿千頭、猪六百頭、兎や野鳥約千羽を得たという。余談だが、この狩の最後に曾我兄弟の父親がゴウツクバリの祖父（伊東祐親）と間違われて、工藤祐経の家臣に討たれたのが仇討の原因になつている。

この数でも分るように日本人は縄文時代ころから猪を食用としてきたらしく、専門の猟師は猪を千頭取るごとに山の神にお供えをして自然の恵みに感謝し、併せて猪の霊を祀っていたようである。作物に害を及ぼすが心底からは憎めない。猪に対する人間の複雑な感情が垣間見える、と言つよりも、一方では猪は靈力を持った

動物として扱われていた節がある。

日本の神話でも常陸国（新治国、筑波国）から甲斐に抜けて、縄文文化と弥生文化の接点に当たる濃尾平野へ向かった日本武尊が、伊吹山に頑張っていた猪のボスを退治に行つて失敗し鈴鹿で没する話がある。熱田神宮の霊力を備えた剣を持たずに素手で出かけて白い猪の毒気に当てられたのである。つまり猪に対し「猪突猛进」をした結果であつて洒落にもならない。

かつて、武士階層に信仰された「摩利支天」という神様が居る。護身得財の神様であるが、「ご神体は日光と月光であり、その像を殆どは見る事が出来ないと言われる。摩利支天は三日月の上に立っているらしいが、その三日月を背中に乗せている、つまり摩利支天の馬代わりの動物が猪らしい。

摩利支天は輸入された神様だから偶々、ご神体を見た武士は仰天した。狩で射殺しては鍋にしている猪が神獣とは…。害獣であり美味な肉材であり、幾らでも捕獲出来そうな猪が現在でも何となく中途半端に扱われているのは、そのことに原因があるのかも知れない。

同じようなことが猪から七代目で変身するという豚についても言える。人類が最初に家畜化した動物は山羊と羊のようだが、同じ頃に野牛から畜牛が、猪から豚が出来たのであろう。

ザク口の原因であるイラン高原で発見された紀元前八千年代の初期メソポタミア文明遺跡からは鹿、羊、豚（猪）、狐、山羊の骨が発見されたという。この場所は定住遺跡ではなく狩

猟時のキャンプ跡とされている。

野生の動物を生け捕りするのは容易ではないが最初に捕まつたのは集団で移動する山羊、羊らしい。几帳面な動物で行きも帰りも同じような道を通るから、先ず、犬がそこに目をつけて待ち伏せの狩をしていた。それを人間が真似て一網打尽にする。ついでに犬も捕まつて狩の手伝いをさせられたり、食料になつたりした。

獲物が多いと一度には食べ切れないから肉の鮮度を保つために柵を作つて一時的に飼つておくのだが山羊、羊の餌は枯れた雑草で済むから安上がりだし、犬はオコボレの羊肉で済む。

捕まつたほうも、服従の態度を示せば餌を貰えるから野山に生きるより楽なので、そちらの道を選び山羊、羊、犬が先ず家畜になつた。

牛の場合は肉のほかに牛乳、皮が利用出来て飼ひ馴らせば労役に使えるから貴重な家畜として扱われたよう、地域によつては神聖な動物として崇拜されていた。人類最初の大集落跡と言われるアナトリア（トルコ）の遺跡からは、牛を祀つた祠が発見されている。

ところで、猪を飼ひ馴らして豚にした人類はその肉の旨さに仰天して家畜化を進めた。紀元前六千年代のメソポタミアにおける発達した農村の遺跡から推定される家畜の割合は山羊・羊が半分、豚が二丁三割、牛が一割、そして犬や鶏やらで残りの一割となつている。

紀元前三千年頃の初期王朝時代と見られる荘園遺跡からはビール工場、パン工場、織物の工場や菜園、それに驢馬、牛、豚、羊類の飼育牧

場が確認されているらしい。

羊や山羊も食肉用だが、独特の臭みがある。豚は、見るからに食用以外の何物でもないから家畜の中でも権威ある存在として威張っていたものと想像される。しかし人類が発展していくうちに難しい問題が起こつてきた。

既に述べたように雑食性の豚（猪）は山羊、羊、牛のように草を喰わないから人類の食料と競合して凶作の時などは飼育の餌に困るようになった。さらに聖書の世界では、猿ではなくアダムが人類の祖となり、その息子二人が農業に従事するカインと牧畜業のアベルに分かれてしまつたから豚（猪）の立場も微妙に変わった。

農耕民族と遊牧民族が明確に区分され、しかも文明発祥の大地が荒れて農耕より牧畜に適するようになったから家畜のエリート地位が豚から羊に奪われてしまつた。中東の砂漠地帯で興つた三つの宗教、ユダヤ教に始まるキリスト教、イスラム教も本質的には遊牧民族の宗教であり聖書などに登場するのも羊たちである。

餌代などの経済的理由と、太り過ぎと短足で旅に出られないことなどで、遊牧民族に見放された豚（猪）は、紀元前三千年の後半頃に飼つことがタブー視されたと考えられている。

特に隊商部族が興したイスラム教では、砂漠での困難な生活を想定して教祖マホメッドが制定したコーラン（全生活面を規制した法典）に豚肉を否定しているらしいが、これも美味い豚肉など望むべくもないからであらう。

結局、猪から豚に進化（考えようによっては

退化)した原点の古代文明発祥地では、現代に至るまで五千年以上も豚は穢れた存在として扱われているのである。勿論、猪も同罪だと思われる。ただ幸いなことにヒンズー教国のインドでは、少数のイスラム教徒以外は、餌の関係もあるが牛を神聖視するほか豚は豚で済む。

先に紹介した「猪の背に乗る摩利支天」が偉大な力を持つ神として、七福神には入っていないまでも日本で武士に信仰されたのはインドから伝わってきたからである。

豚小屋という汚いイメージで見られ勝ちだが豚は本来、綺麗好きで動物なのだとか。ただ猪がダニ落としか何かの理由で泥の中に転がる習性があるため、猪も豚同様に汚れていると思われているとすれば残念なことだが、人間は泥遊びをする猪を攻撃したらしいから、獲りたての場合は泥付きの状態である。

現在でも猪は山間部にいるであろうが、茨城県と鹿児島県は豚の飼育の本場らしい。古い時代に餌(経費)の関係でタブー視されるようになった豚だから、飼うにしても食糧事情が良い地方でないといえない。鹿児島は薩摩芋の本場だから戦時中の人間と同じで豚も芋を主食にできるようだ。茨城県の場合は芋以外の食糧が豊富にあるから養豚が盛んなのだとは考えられないだろう。

七十五%は山地と言われる日本で三十数%の耕地率を持つ県は茨城と埼玉しかない。しかも海あり湖あり大河あり山もあって耕地が広い。その上、台風などの災害も雪も少なく恵まれた

地域は、そうざらにはないのである。

九州に生まれ奈良盆地に興った大和朝廷は、東へ東へと征服を進めて関東平野に行き当たり遠回りをしながら筑波山を越えてみたら、そこに資源豊かな広大な台地を見つけた。勿論、猪も我が物顔に駆け回っていたし縄文時代の名残で栗なども豊富、魚介類も沢山に獲れる。

常陸国は大和朝廷の東北(蝦夷)征服拠点として重要視され、常陸国府(石岡)が東海道の終着点になった。日本六十余州の中で十三の大国があり、さらに特に豊かな常陸、上総、上野の三か国は、坂上田村麻呂らの征服事業で東北が安定してきたため、天長三年(八二六)からは国守は親王に限られることとなる。

丁亥の出来事を冒頭から列記したが、現代から二十回前の、つまり千二百年前の丁亥の年は平安遷都や蝦夷征伐などで大変だった桓武天皇時代が終った翌年になる。第一皇子の安殿親王(平城天皇)が皇位を継いで世の中が安定する筈のところ、女官長の藤原薬子が天皇の威を借りて宮中を掻き回し大騒動を惹き起こす。その発端となる伊予親王(天皇の異母弟)謀反事件や伝染病流行など、やはり混乱の年になった。

人類は猪を貴重な蛋白源としていながら一方では猛然とダッシュするエネルギーに脅威と尊敬の念を抱いていたのかも知れない。摩利支天の馬代わりのほか、三蔵法師の物語でも猪八戒が登場し、瓜坊(子猪)は童話の題材で可愛がられる。現代でも深刻な農作物の被害が問題にされながらも積極的な猪退治の話は聞かない。

そういつた人間のご都合主義に対する猪・豚連合の鬱憤晴らしが、六十年ごとの丁亥を波乱の年にしたのだろうか。勝手なお願いで、平成十九年丁亥が穏やかであるように祈っているが健康のためには肉も食べたい。ゴメンナサイ。

最後の一片 最期の日(ひとひ)

鈴木真紀子

初めての秋を迎えた若い柿の木
丈は幼く か細くとも
葉はみごとに大人びて
見るものの胸をざわつかせる

晩秋の陽を受けて 紅く身を焦がし
さざんか梅雨に 黒く影を落とす
今 その幹の中では

翌春へ継ぐ命のために
根から吸い上げる大地の精気と
死の寸前まで陽を浴びた
葉の精気を求める

凄絶な遺伝子の作用が忙しい
種の保存
何のためらいも 執着もなく
繰り返される

最後の一片を
ある朝 目にし
多分明日は逢えぬだろうと
写真におさめた

涙がでた
美しい最期の姿
声がきこえた・・・

窓辺に独り語り

近藤治平

「君、幸せそうだね」
「あなたは不幸せなの」
「そうだ。不幸だ」
「可哀そうね」
「なんで？」
「だって不幸なんでしょ」
「不幸は可哀そうなのか？」
「そうよ。不幸なんだから可哀そうよ」
「そうかな」
「可哀そうかな」
「可哀そうよ」
「不幸が何で可哀そうなんだ？」
「可哀そうじゃない、不幸なんだから」
「そうかな」
「そうよ」
「不幸って嬉しいじゃないか」
「不幸が嬉しいの？ 変よそんなのって」
「変かな」
「そうよ。変よ。可らしいわよ」
「そうかな」
「そうよ」
「不幸って、生きてるってことが実感できるじ

やないか」

「嫌よ」

「嫌か…」

「嫌よ。そんなのって嫌よ」

「そうか。嫌か。だったらこの不幸を止めさせるために私のこと、愛してくれるかい？」

「私があなを愛すの？」

「そう。愛してくれる？」

「私があなを愛さないとあなたの不幸は止まらないの？」

「そう。不幸は止まらない」

「本当に私があなを愛さなければ不幸は止まらないの？」

「そう。止まらない」

「私、困るわ。そんなの」

「そんなの…か。やっぱり私は不幸だ。これを嬉しいと思わなかったら、そう進化させなかったら、私は生きては居られない。不幸だから心がヒリヒリ痛んで、生きていると嫌でも思ってしまう。不幸が生きているを感じさせてくれるのだから、これは矢張り嬉しいことだと思うしかないんだよ」

「おかしいわ。そんなのって」

「そうかな」

「そうよ。不幸を進化させると嬉しいなんておかしいわ」

「そうか。おかししいか」

「もう嫌！ 何度も同じ言葉を繰り返さないで私、気が変になりそう。だってこのまま話しても終わりが無いのですもの」

「そうか。終わりが無い…か」

「そう、終わりが無い。だからもう止めましょう」

「じゃあ、終わりにしよう。君の答えを聞いたら」

「私何か聞かれた？」

「そう、聞いた」

「何て？」

「君、幸せそうだねって」

「そうか。それって質問だったんだ」

「ね。だから不幸は嬉しいに進化させなければ絶望になってしまう」

つくばカピオの公演が終わって 小林幸枝

三月のことでした。俳優を職業にきたら素適だろうな、と思い始めていたら、先生から「幸ちゃん本気で俳優さんをやってみる気はないか？」と聞かれた。

「はい」と即答したかったのですが、私が思ったことをズバリと言い当てられた気がして、「考えてみます」と答えたのでした。でも、その夜家に帰って、直ぐに先生のところへ、「やってみたいです」とメールを入れたのでした。そうしたら直ぐに返事を頂き、六月頃に私が座長となった劇団を立ち上げ、一年ぐらしかけて準備をし、来年春ぐらから劇場を押さえて定期的に公演を打っていきこう、といわれたのでした。劇団を立ち上げる話もビックリしましたが、

公演のための準備が一年もかかるのかとそちらのほうが驚きでした。

劇団立ち上げの準備を進め、劇団が立ち上がったから、しゅわーどとの二束の草鞋は履けないからね、と言われていましたので、六月で退団かと思っていたら、突然空きの出来たカピオ・ボールの抽選くじが当たり、しゅわーどの公演が決まったのでした。

六月でしゅわーどを退団する予定でしたので、ちよつと残念な思いをしていたら、先生から一年間世話になった劇団だから、退団は恩返ししてからでいいといわれ、一緒に公演に参加させていただくこととなったのでした。

稽古は八月末から本格的に始まったのですが、先生一人が、お前達には三ヶ月ぐらいの練習では足らん、とイライラされていたようです。でも私はときたらアトリエ公演では正味十日間ぐらいの稽古でやっているんだから、とのんきに構えていたのですが、実際に舞台上立ったとき、やつと先生の言っていたことが分かるというお粗末さでした。

十一月二十六日の公演では、緊張と興奮で台詞を忘れないようにとそればかり気になりましたが、幕が開くと意外なほど冷静で、ライトに照らされた私の舞いに、観客の視線が集まるのを感じたときとても嬉しい気持ちで一杯になりました。一つの演目が終わり、観客の拍手を頂いたときの快感は何にもかえる事が出来ませんでした。

鈴が池物語の舞に「これが人の世なのね。こ

れが生きていることなのね」という詩の部分がありますが、まさにそれと同じ感情になりました。そして、舞台をやる感動・魅力はこれなんだと本当に実感することが出来ました。

公演終了後、神奈川県から来てくれたバレエボールの仲間から、

「幸枝さんにこんな舞演技の才能があるとは知らなかった。凄く感動した」

そう言われたときは涙が出そうになるほどの嬉しさがこみあげて来た。

そして不思議なことに、去年亡くなった祖母が思い出されて、つい石岡物語を舞ったけど、天国からも見えた」と聞いてしまいました。

もう一つ感動したのは、私の友人の聾の人達は、笛を吹いてくださった堀井洋子さんの笛の音は聞こえなかったけれど、堀井さんが自分を表現しようということに集中している心の波長が感じられたと言ってくれたことでした。プロってこういうことをいうのだなって教えていただきました。

カピオの公演が終わって、一日休んで、二十八日から、六月に立ち上げた新しい劇団「ことば座」の稽古が始まりました。本公演は来年二月からスタートしますが、そのプレ公演を十二月十六日に行うので、その稽古です。

でも、二十八日稽古に行って、先生から今日からはプロの稽古をするからね、と言われ、始まってビックリです。これまでの稽古と全く違うのです。物凄く難しく、細かいのです。今までの稽古は何だったんだろうと、初日からプロ

の洗礼を受けています。

今までの稽古と一番違うことは、「いいね」「綺麗に見えるよ」という言葉がなくなったことでした。心配になって、どうですか、と尋ねると「問題ない」の一言。そして「プロは良くて当たり前だからね。それ以上のものがなかったら誰も観てくれないよ」

これは大変なことになった。カピオの舞台で堀井さんが、板敷きの舞台上に正座し、微動だにしない姿勢が物凄く大きく思い出され、これからの自分に気合を入れなおさなければと一日で実感させられました。

十一月で「しゅわーど」を退団しましたが、このルネサンスの会には参加させていただき、拙い文ですが、私を語っていきたいと思っています。頑張りま〜す。

応援宜しくお願いいたします。

たき木とりの神様とよばれて 伊藤由美子

伯母たつが亡くなったのは六十六歳だった。四十年前、自給自足の生活から、やがてくる機械化の時代をむかえはじまった頃、芽吹きから若葉へと自然界も生命力あふれる五月、庭先で倒れた。

戸板に乗って中の間に寝せられてから、「こんこん」と眠り続けていた体は枯枝のようだった。口にさゆをふくませながらみよ子は伯母の息を聞きながら思ったことを今でも、昨日のここの

ようにはつきり覚えていた。

・ 幸せって思ったことはあるのかな

・ 恋をしたことはあるのかな

・ 自分のことを考えたことは……

・ 化粧をしたことはあるのかな……

一週間眠り続けた朝「たつさん、たつさん」とよぶ声にみよ子は伯母の生命の灯の消えたことを知った。涙が出るよりも「ご苦労さま。一生けんめい生きてたわね」とつぶやいていた。

あれから四十年が経ってみよ子もこの秋十六歳になった。急に伯母が恋しくなった。そして伯母の人生の中の喜怒哀楽をおもいだしていた。

小柄な体をえびのように曲げよく動いていた。手足は大きく骨太だった。骨をおおっている皮が一筋一筋深い溝をつくりそこには泥がしみこんでいるような色をし、その手足は休むことを知らないかのようだった。

たき木を集めることが主な仕事で、地内の枯枝、小枝、杉っ葉、松葉など季節毎にありとあらゆる物を集め、潰れかかった庇の下に積み重ね集めて置いてあったが、毎日使うのだからいくらあっても限りなかった。

ある時隣り部落から来た人が地内に入って「たき木を取ってしまった」とくやしがつてかあちゃんと呼ばれちゃったよ」と泣いて母に訴えていた姿をみよ子はよく覚えている。

年末には各々に新しい足袋がある。伯母も嬉しそうにはく練習をしていたが堅い狭い中に足を入れるのは、とても難儀そうだった。すで

にあかぎれがかかるとに出来ていたからで、ぱくつとあいた傷口はみるからにひどい。傷口にあかぎれなんこうをつめ、熱く焼いた火箸でとがす。「ジュージュー」と傷口に溶けこんでいくこうして夜治療しても次の日は、素足にぞうりばき。足は選ぶことなくどこでも歩いていく。こうして傷口が出来る。それが毎日くりかえされていくのだから、こはぜをはめるのも不器用な指先はまたまた一苦労だった。

そんな伯母も楽しそうに字をかくことがあった。子どもたちの集まる縁側で短い鉛筆をなめながら、不器用に指を動かす。「ほらほらで来たよ」とその顔は誇らし気だった。

妹の絵をみては「ほおっ、上手だね、がでほんのようだ」とにこにこしていた。

やがて農村にも有線放送、有線電話が入り、共同水道が出来、改良かまどと家庭内も変わっていった。みよ子の母は「今頃たつさんがいたらびっくりするでしょうね」とよく言っていた。そして必ず「たつさんあなたは、水くみ、たき木とりの神さまだったわね。私を助けてくれて本当にありがとうね」と手を合わせていた。その言葉の重みをみよ子は心にとめて、あらためて伯母の存在感を強く受けとめた。

その時代に生きていくことは、その時代に必要な人間なのだ、自分の生き方をおもつみよ子だった。

墓標もずいぶん前にくち、塚も平らになってしまつて花筒のそばに小さく小高く土が寄せられているだけ。「無」って！ 神さま！ 仏さ

ま！

今年も彼岸花が秋草を色どっている。

菖蒲沢の薬師さま

兼平智恵子

陶芸家の渡辺兼次郎先生の工房をお尋ねしたのは、未だ冬のことでした。

旧八郷町のフルーツラインを過ぎた交差点を右に折れると、菖蒲沢地区に入ります。渡辺先生の工房は、朝日峠を前にした小高い山の中腹にあります。

陽だまりの工房に立ち、朝日峠を見渡すと、緑を深くした針葉樹と葉を落とした木々は紫に染まり、心なしか春が膨らんでいるかに思えました。

自然を仏さまと崇める先生には、野の花の喜びが描かれています。

自然に親しみ、自然をいとおしみ生きてこられたという先生お薦めのコースが菖蒲沢の薬師堂でした。

工房から更に登っていくと古い校舎を思わせる公民館と薬師堂、仁王門の立て看板。道なき道、落ち葉に隠された風化した石段を確かめ、体調を崩しての身体を叱咤しながらゆっくり登ること二十分余り。

大木のある雑木林の中に、今まで眼にしたことのない「型」の趣のある広い境内。傾いている石段を降りると、朽ちかけた祠のある弁天池と落葉の庭園。向かい側の石段を上がると、入り

口の引き戸もなく、壊れかけた本堂の中に、穏やかさと優しさに満ちた黒塗りの薬師さまが、仁王さまに守られ、静かに鎮座されていました。心ない人に荒らされず、多くの方々の心のよりどころとなり、崇められるように祈りながら次回を約束し、後にしました。

冬の陽に愛されて

鉦を持つ老人に愛されて

菖蒲沢の里は

黄金の色に染まった

八朔の手のひらに三個

再び訪れた時には、山はピンクと若葉に彩られていました。

菖蒲沢の薬師さま桜散らしておもてなし

弁天池に姿映して おしゃれする山桜

山奥でじつと待つ尼僧 何処に

花吹雪 心吹雪

ぼっぼつと桜の点る もえぎの里

昭和の初期までは各地から多くの参詣者が訪

れていたとの事。徐々に人足が途絶えた後は、地元の皆さんに愛され続けてきました。

先月、十一月二十三日に、薬師堂に通じる薬師古道として復元整備されました。薬師さまもお忙しくなりそうです。慈悲に満ちた和顔で迎えてくれることでしょう。

私は、山行の友達四人と新しい年の一月九日を心待ちしています。

風の声 風の容

白井啓治

何年ぶりかに小津作品のシナリオを開いてみて驚いた。台詞がみな詩になっているのである。登場人物の台詞は、どれもが説明を省いた「風の声、風の容」として紡がれており、会話歌になっているのである。

会話歌などというもの、これまで聞いたこともないのだが、会話歌というものを書いてみたくなった。

来年の二月に「ことば座」という劇団の旗揚げ公演を行う準備のために、このところ石岡市柴間にあるギター文化館によく出かけているのであるが、その喫茶室から眺める雑木林が実に良い。

先日のことである。カップの底に冷たくなって残っていたコーヒを一口に流し込んだとき、谷を流れる風の声が聞こえ、風の容がみえた。これはもうこの風景に向って会話歌を吟じてみるしかない。

「会話歌」など思ってもみなかった新しい挑戦である。いや、本当は新しくも挑戦なんて大げさなものではないのだが、一つの発見の中から今までは少し違うことにトライしてみることは心が弾むものである。

ことば座は、小林幸枝が朗読舞&朗読舞劇で「常世の国の恋物語百」に挑戦しようと立ち上げた劇団であるが、もしかした「会話歌」というスタイルが一つの柱を形成してくれると嬉しいのだが、これは小津作品を仲介に柴間の雑木林が私にくれたクリスマス・プレゼント「風の声 風の容」なのかも知れない。

(編集後記)

とても嬉しい応援者がおられ、励ましのお便りを何度か頂きました。返礼を書きましたら早速にまたお手紙を頂き、感激しております。とてもいいお話がありましたので、少し紹介をと思いましたが、了承を得ないまま乗せることが出来ませんので、次の機会にでもご紹介したいなと思っています。六月に第一号を出し、もう七号になりました。来年は、もう少し紙面を増やし、作品の発表の場にもしていききたいと考えております。

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)